

りますので、今回、津波の後全電源が喪失した後も、まずは現場の確認というよりは、中央制御室の中でこういったものが動いている、こういったものが使えない、表示盤の確認に努めていたということでございます。

その後、建屋の中に入って状況の確認作業を進めたということでございますけれども、なかなか電源がない、建屋の中が暗い、あるいは下の方の階が浸水しているというようなところで、なかなか作業が思うように進まなかったというような状況でございます。冷却系設備である IC の状況確認についても、恐らく 17 時台に一連の作業が行われていたのではないかとこのように思われますけれども、線量の上昇が確認されて、IC のところに作業員が入って胴側水位の確認といったような動作状況の確認はできなかったというようなことございました。

そういった詳細については、参考資料の 3 に書いておりますので、ごらんいただければと思います。当時の状況としては、地震が来た後、津波が来る前は、その下にも少し書いておられますとおり、やはり通常の対応を行っていたということを強調しております。大津波の警報が出ていたわけでございますけれども、プラントに影響するような津波が来るというような認識はなかったということでございますし、当然のことながら、手順書に沿った手順で冷温停止までもっているだろうという認識を持っていたということございました。

そういったところで、IC の操作が行われていたということでございますけれども、参考で 4 ページ目をごらんいただければと思いますが、非常用復水器を持っている発電プラントは、ほかに敦賀の 1 号機がございます。こちらについては、我々の方で日本原電に依頼をいたしまして、過去にこういった作動状況があったのかということについて調査をお願いいたしまして、関係資料を提出いただきました。その日本原電から提出いただいたものは、参考資料 5 という形で付けさせていただいておりますので、また詳細はごらんいただければと思いますけれども、同社におきましては、過去 10 年間に落雷といったようなところが背景に、2 度ほど IC を実際に操作していた実績がございました。これは、自動で起動したわけではなくて、手順書に沿った形で IC を手動で起動して操作したということでございます。

4 ページの右側に、そのときの一例としてプラントの原子炉圧力のプラント記録、チャートを掲載しておりますけれども、原子炉圧力が上がってきては下げ、上がってきては下げという形で、圧力を 6.37～6.86MPa といったような、6 メガ台で調整するというを行っていたということでございます。

このときにも、使っていたのは 2 つの系統があるわけですが、1 つの系統を手動で弁の開閉作業を繰り返していたという形で、圧力を調整していたということございました。

今回、1 号機で操作していたものと類似の操作が行われていたと考えられるかと思えます。

5 ページ目、IC の関係では、弁の開閉のロジックというものが少し焦点になっておまして、今回、IC については外部電源が喪失して、あるいは直流電源も喪失するという事態になりまして、これは隔離動作が働いて、各系統 4 弁あるわけですが、4 弁すべて隔離動作したと考えられております。

こうした電源喪失による隔離動作については、ほかの冷却設備についても我々調査、確認をいたしましたけれども、5 ページ目の括弧書きで明朝体で書いておりますけれども、注水する設備、ECCS あるいは RCIC といったような設備については、制御電源が失われた場合は開維持、fail as is という形で機能するのに対しまして、IC といったようなもの、あるいは格納容器隔離弁といったようなものについては、隔離を優先するというので、閉まってしまうという形で動作すると